

イスラエルの検問を通るときは、本当に怖い。銃を構えた人たちの前を通るときには、心臓が凍りそうになる。

6月下旬、ぼくはイスラエルとパレスチナの地を訪ねた。ガザ地区に入る直前、イスラエルによる空爆で、パレスチナ人13人が殺されたという情報が入ってきた。予定を3日間延期し、6月28日にガザ地区に入った。

検問では緊迫感が漂っていた。厳しいパスポートチェックを受けながら、じっと息をひそめているしかない。ようやく通過できるかというとき、パスポートチェックをしていた若い女性が、ニコリと笑った。

「ハッピー・バースデー」

何のことかわからなかった。この日は偶然、ぼくの誕生日だったのだ。緊張で忘れていた。まさか、イスラエルの検問で、お祝いの言葉をかけられようとは思わなかった。

ちょっとだけ心がなごんだ。同じ人間の血が流れているんだと、うれしくなった。

この地へは2度目の旅である。1度目は、ヨルダン川西岸にあるジェニンというまちのパレスチナ難民キャンプで、05年に実際に起きた出来事を取材するためだった。12歳の少年、アハメド君が、イスラエル兵に銃で撃ち殺された。父親のイスマイルさんは、重い病気の子どものを救うためにアハメド君の心臓を提供することを承諾。心臓はイスラエルの心筋症の少女に移植された。この話をぼくは「アハメドくんのいのちのリレー」(集英社)という絵本にした。今回の訪問は、この絵本をパレスチナとイスラエルの人に読んでもらう目的だった。

絵本はアラビア語とヘブライ語の翻訳版もつくった。翻訳版をつくることは、この絵本をつくろうと思ったときからの夢であったが、パレスチナ難民の救援に取り組んでいるUNRWA(国連パレスチナ難民救済事業機関)の保健局長、ドクター・清田や関係者の方々の協力を得て、思いのほか早く実現した。

イスラエルの中枢の機関が置かれているエルサレム、パレスチナ自治政府の主都ラマラ、キリスト聖誕教会があるベツレヘム、エリコ、ガザ、テルアビブ……。さまざまな場所で絵本を配った。パレスチナ人にもイスラエル人にも感想を聞き、平和について議論して歩いた。命のリレーの物語を真剣に考えてもらうことで、60年以上紛争が続く地が、平和へと歩みを進めることができれば、こんなうれしいことはない。

しかし、予想はしていたが、積年の紛争の壁は、分厚く目の前に立ちはだかった。

「この絵本は感動的である。しかし『憎しみを横におく』という言葉がでてくるが、憎しみは横におけない。われわれは憎悪をバネに生きてきた」

数人のパレスチナ人に、はっきりと言われた。

ベツレヘムの若者からは「自分たちはこれからも、イスラエル兵に撃ち殺されて、臓器を次々にイスラエル人に与えろ、ということなのか」と、厳しい質問とも、いら立ちともいえる感想を聞かされた。

もちろん、そんな意図でかいたのではない。少年が兵士に撃ち殺されるなどという悲劇は、二度と起こしたくない。

だが、その悲劇のなかで、少年の父親は、息子を失った悲しみを横において、病気で苦しむ子どもを助けたいという気高い行いをした。その相手が偶然、イスラエル人だったのだ。

青年の話を聞いていると、いら立ちの背景に、自由を拘束され、外国に行くこともできない現状が伝わってきた。

ベツレヘムのまちの真ん中にはイスラエル人の入植地が広がり、その周囲を分厚く高い分離壁が取り囲む。壁の向こうの高台には、イスラエル人たちが住む豪邸がそびえている。パレスチナ人の住む家とまるで違う。

医療水準の問題もある。パレスチナはイスラエルに比べて移植医療が進んでおらず、臓器が提供されても、臓器を利用するシステムが出来上がっていない。だから、どうしてもパレスチナ人の臓器は、イスラエル人に移植されることが多くなる。それが現実なのだ。

絵本の感想を求めると、政治的な問題が不満となって次々と飛び出してきた。でも、議論のなかで「ぼくは平和に向けてこの絵本をかいた。平和のために役に立たないならば、絵本を出版する気はない」と言うと「あきらめるな、やれ」という声が返ってきた。彼らだって本当は平和を望んでいるのだ。

ガザ地区で会った30代の女性は、子どもたちにこの絵本を授業で読ませて、平和や人間の愛について、ディスカッションしたいと語った。子どもたちがいつか大人になり「もう戦争はいやだ」と叫んでくれたら、この絵本は決して無駄ではない。

アハメド君の心臓をもらったイスラエルの少女、サマハさんは19歳になった。看護大学に合格し、来年から看護師の勉強を始める。イスラエル人がパレスチナ人かによらず「人の命を助けたい」という。サマハさんがパレスチナの難民キャンプの恵まれない子どもを一人でも救ったら、パレスチナ側の憎しみも消えるかもしれない。

イスマイルさんは、パレスチナの子どもたちが安心してまちで遊べるようにしようと活動している。彼は、彼の活動を支援しているイタリアやドイツ、スペインなどでこの絵本が出版できないか、支援者たちに掛け合う、と言ってくれた。

道は遠く、険しいけれど、平和へ向けての小さなきっかけをつくり続けていきたい。

(医師・作家、題字も) =次回は28日掲載

・
・